

和歌山城跡

— 県営城北団地建設に伴う発掘調査 —



1997年 3月

(財)和歌山県文化財センター

例　言

1. 本書は県営城北団地建設に伴う和歌山城跡発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は和歌山県土木部住宅課より和歌山県文化財センターが委託を受け実施した。
調査面積は約990m²である。現地調査の期間は1996年11月20日から1997年1月31日までで、その後応急整理を行い概報を作成した。
3. 調査ならびに本書で使用した座標値は国土座標第VI系のもので、図示した北は座標北、標高は東京湾標準潮位(T.P.+)の数値である。
4. 調査にあたっては和歌山県土木部住宅課、および株式会社淺川組の協力を得た。また、本書の作成にあたっては図および図版作成に久貝洋子・杉本圭・谷口敦子・宮本真由美・濱田美穂子・山口愛子の助力を得た。記して謝意にかえさせていただく。
5. 発掘調査並びに本書の作成は、文化財センター 主査 村田 弘が担当した。

目　次

例　言　・　目　次	図 7　遺物実測図(3).....	11
I　位置と環境.....	表 1　和歌山城略年表.....	3
II　調　　査.....	写真 1　調査区西端土層.....	4
1　遺　　構	写真 2　調査区東端土層.....	5
a　第一遺構面の遺構.....		3
b　第二遺構面の遺構.....	図版 1　第一遺構面全景	
c　第三遺構面の遺構.....	図版 2　第一遺構面東半部・第一遺構面西半部	
2　遺　　物.....	図版 3　礎石建物(SB-03)・礎石建物(SB-02・03)	
III　ま　と　め.....	図版 4　礎石建物(SB-01・02)・根石・土塀基礎	
図 1　調査区位置図.....	図版 5　地鎮容器埋納状況・防空壕	
図 2　和歌山城下町図.....	図版 6　第二遺構面全景	
図 3　第一遺構面平面図.....	図版 7　礎石建物・土塀基礎・井戸	
図 4　第二遺構面平面図.....	図版 8　第三遺構面全景	
図 5　遺物実測図(1).....	図版 9　出土遺物(1)	
図 6　遺物実測図(2).....	図版10　出土遺物(2)	

I 位置と環境

和歌山城は、和歌山市内の中南部、和歌川西岸の吹上砂丘北端部にある岡山に築城された平山城である。和歌山城の名は、城のある岡山がなまっとも、古代よりの景勝地である和歌浦と岡山を合わせたとも伝えられている。

岡山は、平地部にあって標高46mの独立した丘陵状をなしており、天正13年の『紀州御発向記』に「彼岡国府中而平地独秀城郭也、南和歌浦、西吹上浜、從東紀川北流入紀港、麓林深諸木交杂、誠万景一覽之境也云々」とあるように眺望・交通・景観からも近世城郭の最適地と言える。

この地に城が築かれるのは、天正13年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めを契機としてのことである。同年4月、秀吉は紀州攻めを無事終え、大阪に帰還していったが、弟・秀長に命じて和歌山城の普請に取りかからせた。その際、太田城の水攻めのための築堤に動員された近在の百姓1万人が、そのまま城普請にかりだされたと言われている。

秀長はその後、四国に出陣して、さらに大和郡山城に入ったため、築城後の和歌山城には、家臣の桑山重晴が城代として在城した。

この桑山氏時代の城郭についての史料はないが、現在の本丸・二の丸部分に見られる緑泥片岩を用いて野面積みしている部分が、その創建期のものと考えられている。この時期を和歌山城の

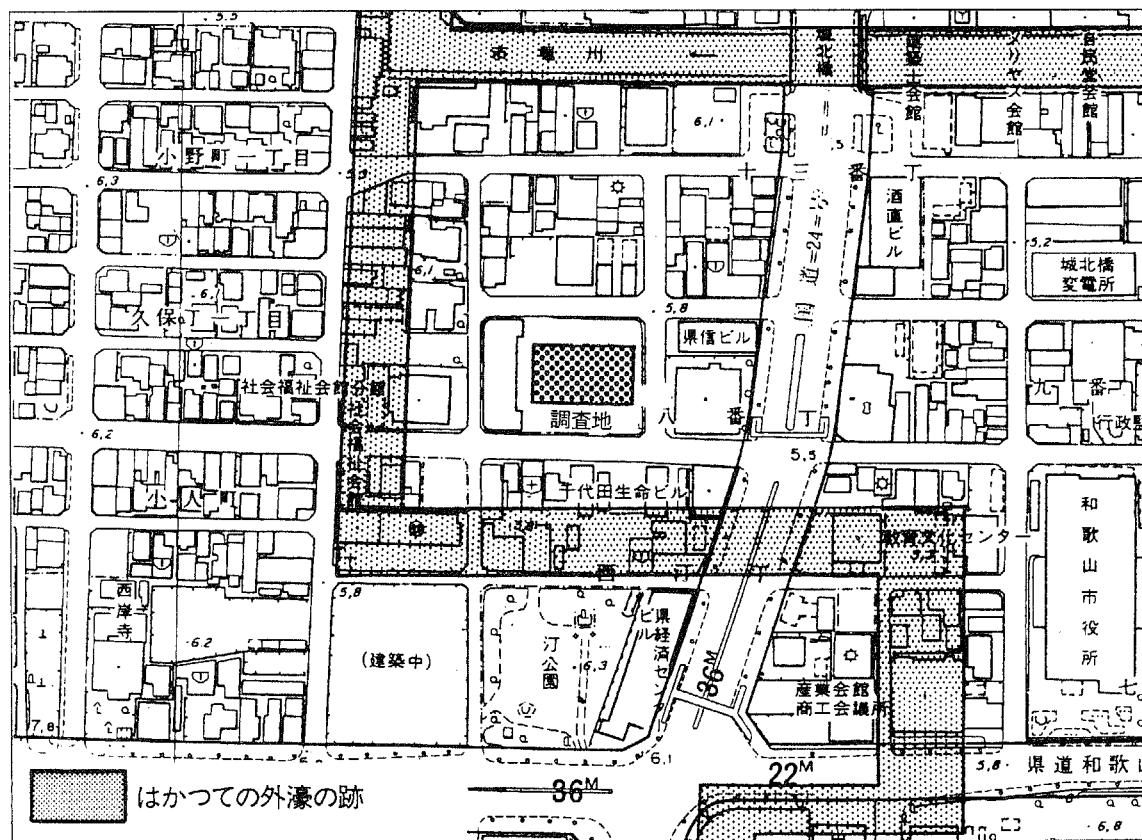


図1 調査区位置図

第Ⅰ期と言えよう。

ついで第Ⅱ期と言えるのは、関ヶ原の戦い後、桑山氏が去り、かわって軍功のあった浅野幸長が三十七万石を領して入城した時期である。幸長は、三十七万石の大名にふさわしい居城とするため、和歌山城の大拡張工事に取りかかった。

これまで青石(緑泥片岩)を用いていた石垣も強固で見栄えのよい和泉砂岩とし、天守も基壇上に大天守・小天守・角櫓・多聞櫓を並べる連立式天守閣とした。また、二の丸・三の丸大手道も作った。

この浅野氏も在城期間は短く、元和五年(1619)に広島に転封となり、かわって家康の十男徳川頼宣が新しい紀州藩主となって入城する。頼宣は、幕府から特に城の増築を許可されて、城を南方と西方に拡張するとともに、本丸の拡充や庭園を作るなど、名実ともに和歌山城を紀州徳川家繁栄の礎とするのである。これをⅢ期とすることができるようし、当然ながらこのⅢ期の期間は長く明治まで至る。

この間、城下町もしだいに整備され、当初、町屋と武家地が混在していたものが、元禄年間までに大きく八区域に分かれ、宇治・広瀬・岡・吹上といった武家屋敷地と大部分が町屋となる内町・北新地・新町・湊となって完成する。また、諸方へ通じる街道も京橋北詰を起点として整備された。城下町の人

年 月	西暦	記 事
天正13年11月	1585	秀吉自ら虎伏山に縄張りをし桑山重晴に命じて鍔初式を挙行した普請奉行、藤堂、羽田両守によって本丸、二の丸を竣成した。
天 正 14 年	1586	秀長の家臣・桑山重晴が城代として和歌山城に在城した。
慶長 5 年11月	1600	浅野幸長三十七万石を領して和歌山城に入った、城の内濠外濠を拡張して石垣を完成した。
元和 5 年 8 月	1619	徳川家康十子頼宣駿府から紀州、勢州を加えて五十五万五千石を領して入城した。
元 和 7 年	1621	和歌山城郭を拡張、大手を一之橋門に移して南之丸を拡張し高石垣の築造をした。
寛 永 6 年	1629	南之丸櫓代、吹上口橋石塁の普請をした。
弘化 3 年 7 月	1846	和歌山城天守閣に落雷大天守、小天守、その他建造物が全焼した。
弘化 4 年 11 月	1847	扇之芝に天守閣再建普請場を設けてチヨンナ初式を挙行した。
嘉永 2 年 11 月	1849	和歌山城天守閣、上棟式を行った。
明治 4 年 7 月	1871	廃藩置県によって和歌山城は廃城となり和歌山藩を和歌山県と改称、本丸、西の丸、南の丸、砂の丸は兵部省の所轄となった。
明治18年 7 月	1885	二之丸御殿の建造物を大阪城千疊敷址に移建されて紀州御殿と称えられた。
明治34年 4 月	1901	和歌山城を和歌山公園として初めて公開した。
大正 2 年 2 月	1913	和歌山城は内務省から和歌山市立公園とするため総坪数六万二千六十五坪五合五匁を六万円にて和歌山市に払い下げを許可された。
昭和 6 年 3 月	1931	和歌山城郭一部は文部省より史跡として指定せられた。
昭和10年 5 月	1935	和歌山城天守閣大天手、小天手、隅櫓、楠門多門、倉庫は国宝建造物に指定された。
昭和20年 7 月	1945	戦災により焼失
昭和32年 6 月	1957	東京工大藤岡博士設計により鉄筋コンクリートで復元着工。 岡口門(付土塀一棟)は重要文化財に指定された。

表1 和歌山城略年表
(和歌山城管理事務所作成資料より抜粋改編)

口について言えば、前述のⅡ期・浅野氏時代では二万人ほどと推定されているが、元禄年間では六万人以上と推定されており、徳川御三家のお膝下として繁栄していたことが窺われる。

この和歌山城も、諸藩の例に漏れず、明治6年の大政官達により本丸・二の丸はじめいくつかの門も解体される。さらに昭和20年には、米軍の空襲をうけ天守閣は炎上し、市内の中心部、かつての城下町の大半が焼尽くされた。

今回の調査地は、この和歌山城の三の丸にあたる部分の一画である。三の丸は、天守閣から見れば、北西方向にあたり、和歌山城内郭の北と東を囲む部分であり、重臣や上級武士の屋敷地であった。図1にも図示したように、現在はビル街と化してしまっているが、かつては西・北・東

の三方に外堀がめぐり、南は内堀で内郭と画されていた。また、この堀の内側には、高さ 5 m ほどの土塁が巡らされており、その上には松が植えられ、斜面は竹などで覆われていたと考えられている。これらの堀については、ほぼ昭和 5 年までに現在の状況に埋立てられた。

この三の丸は、すでに浅野氏の時代につくられていたようで、やはり上級武士の屋敷を配していたことから「惣構」を成すものであったと言えよう。

徳川家時代には、新宮城主である水野家・田辺城主安藤家・家老の三浦家など名だたる重臣の屋敷があった。今回の調査地は、この三の丸の中でも西端に近く、西の丸川に面したところと考えられ、現存する「寛政城下町絵図」では、下条家・鈴木家にまたがる部分と推定される。両家とも絵図に描かれた寛政年間には家老加判列に列している。

なお、この付近は先にも述べた昭和 20 年の空襲ではもっとも被害が大きかった地域であり、近くにあった旧県庁跡広場では、大火災特有の旋風によって 748 人の人々が無残な焼死をとげている。事実、今回の調査においてもその折の焼土が多量に検出され、また、防空壕などの施設が確認されている。

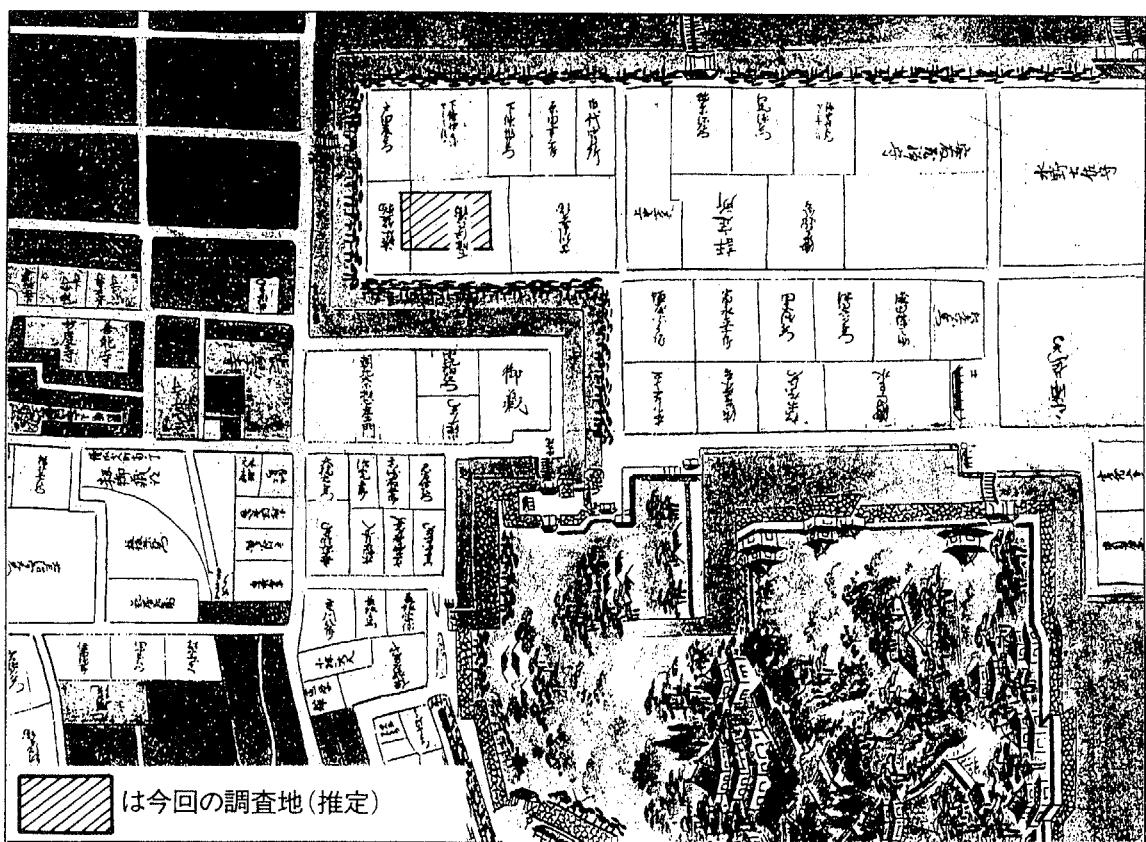


図 2 和歌山城下町図(部分)

II 調 査

1. 遺構

今回の調査は、県営住宅の建て替えに伴うものであり、調査区の北側および南側は、旧の住宅の基礎により擾乱を受けていた。遺構面は、当初一面と考えられていたが、調査の過程で最低でも三面あることが確認できた。このため下層遺構についてもできる限り調査を実施したが、期間・予算の関係上これらについては対象面積を縮小して行っている。

a. 第一遺構面の遺構

第一遺構面としているものは、昭和20年を下限とする面である。したがってここではたとえ土管あるいは煉瓦づくりの排水施設といった新しいものであっても、あきらかに昭和20年以前のものについては、遺構と認識して調査にあたっている。

この面で検出した遺構には、建物跡・土塀の基礎・便所・防空壕などがある。

このうち建物は調査区の西側で集中して検出された。これらはいずれも礎石建物である(SB-01~04)。礎石については残っているものは少なく、大部分が根石のみという状況であった。根石の堀込みは、径60cm前後で、深さは40cmほどであった。根石は10~30cmほどのものが用いられており、片岩の風化したものが混じる砂質土によって埋められていた。個々の根石の位置から図3に図示したように4棟の建物を復元した。柱間は2m前後で、おそらく7尺を基本とするものと思われる。いずれも2間×3間ほどの建物になるものと考えられるが、SB-01・02のように一間分の張出しがつくものがある。この張出し部分については、入口であった可能性を考えている。

これらの建物は、一見古く、当初は江戸時代のものと考えていたが、他の新しい土坑との切り合い関係、出土遺物——このうち二つの根石の堀形内から板ガラスが出土していることなどから、新しいものと判断せざるを得なかった。その具体的な建築年代については、不明であるが、明治の末以降、昭和初年までの間に建てられた可能性が高いものと考えている。



写真1 調査区西端土層



写真2 調査区東端土層

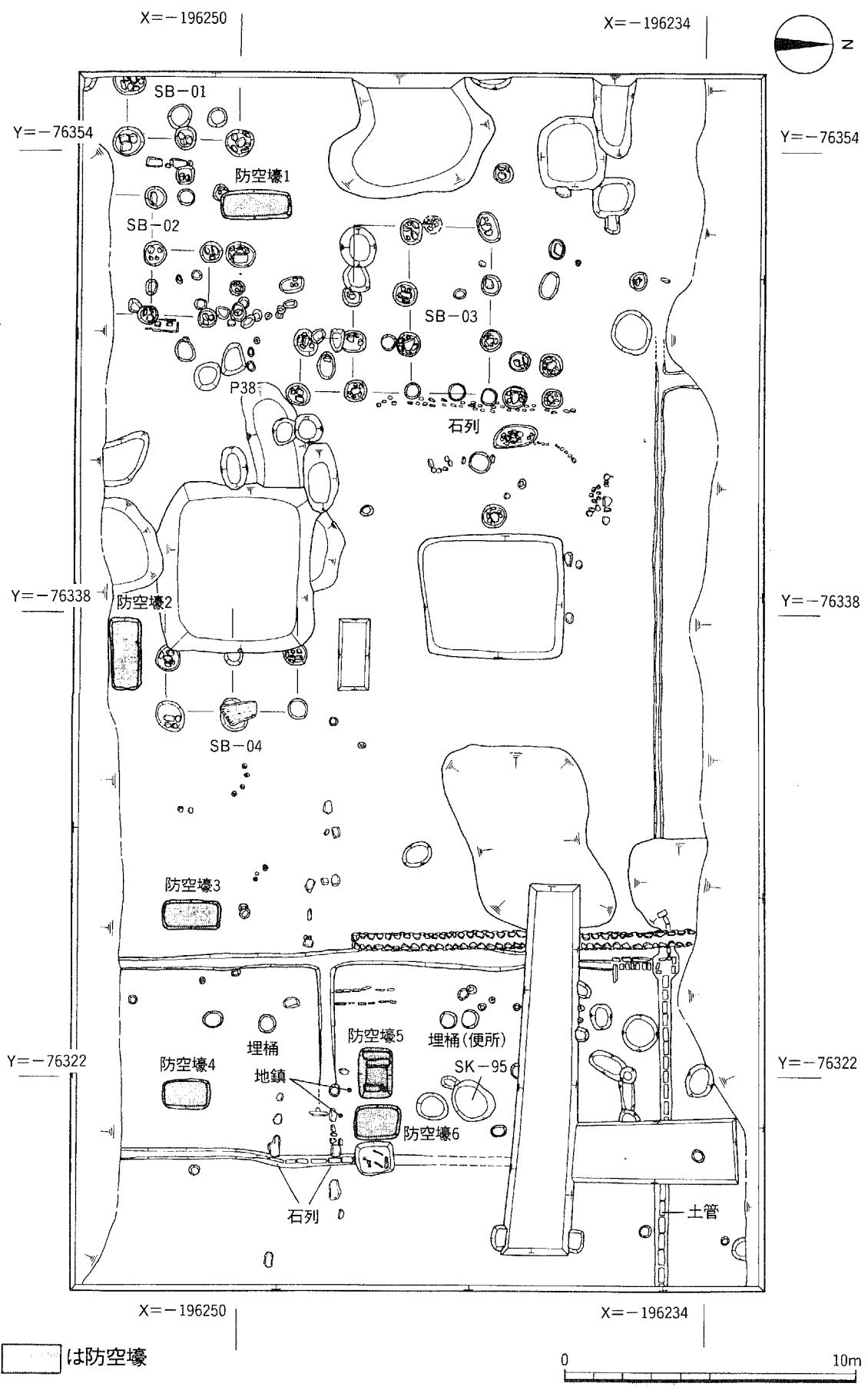


図3 第一遺構面平面図

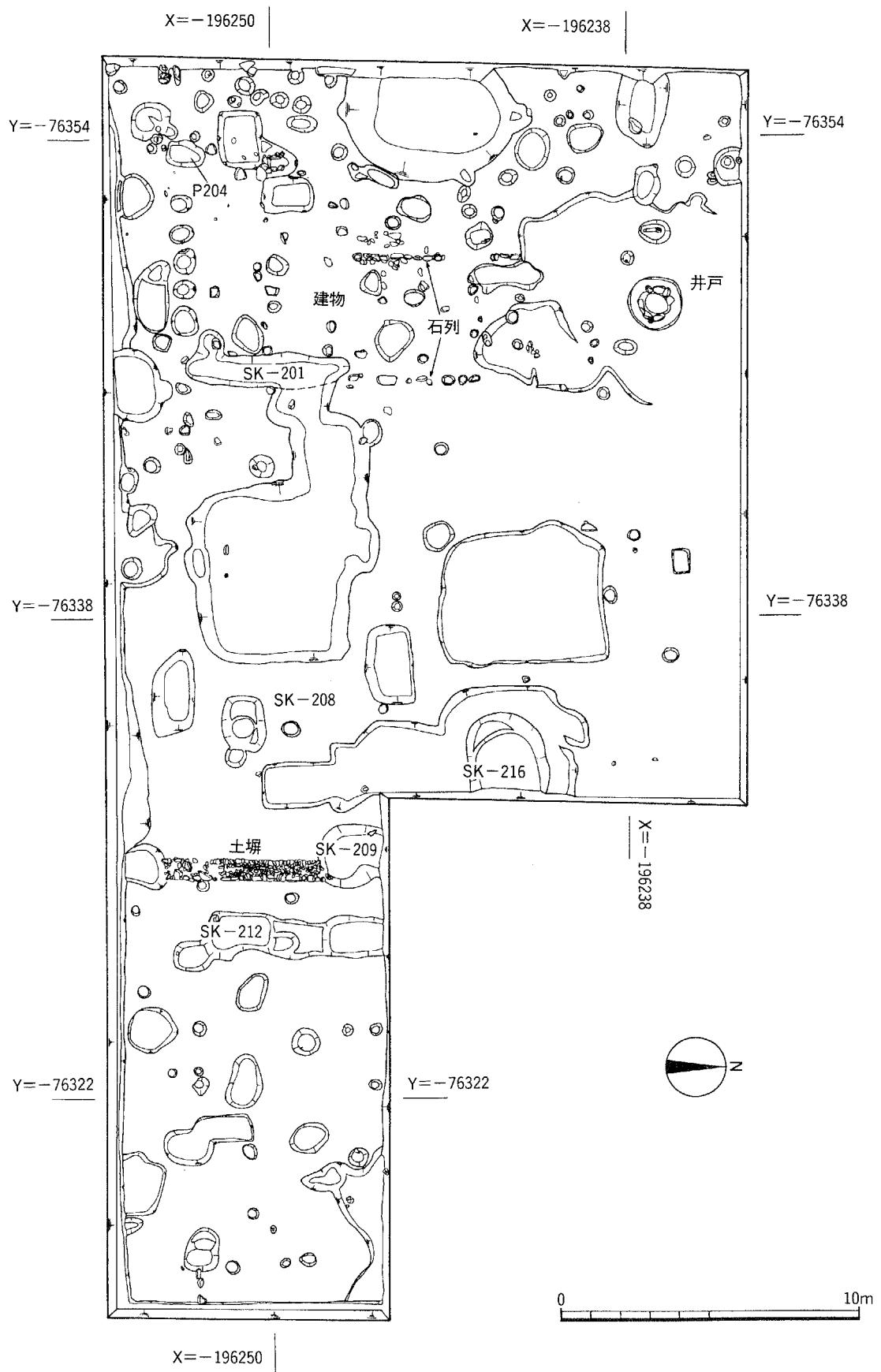


図4 第二遺構面平面図

土壠の基礎は幅60cmほどで、2ないし3段が残存していた。使用されている石は、10cmから30cm大のもので、片岩と砂岩が混在して使われていた。この土壠も調査区北側で東西方向に埋設された土管および煉瓦による溜柵状の施設の上に造られていることから具体的な年代は不明だが、かなり新しい時期のものと判断されよう。

調査区の東側には、昭和20年の空襲による焼土が10cmほどの厚さで堆積していた。この焼土を取り除いた面で防空壕・便所・石列などが検出されている。

防空壕は6基検出したが、いずれも1m×2m前後の長方形で深さは浅いもので1m、深いもので1.5mほどの大きさであった。この規模あるいは密集してつくられていることからもこの地に住まいしていた各家庭用のものであったと判断される。砂地を掘ってつくられており、壁部分は崩れないように板塀で補強されていたと考えられる。事実、防空壕2ではその部材と思われるものが焼けて炭化した状態で出土していた。また、防空壕5のように昇降に簡単なコンクリート製の階段を設けているものもあった。

埋め桶は3基検出している。いずれも径60cm、深さ60cmほどである。このうち2基については痕跡物が付着しており、便所として使用されていたことは確実である。

b. 第二遺構面の遺構

第二遺構面は、第一遺構面から30cmほど下ったところで検出した面で、第一面と同様に砂地である。この間の包含層が第2層である。遺物実測図に掲載した遺物だけを見れば、唐津など17世紀代の遺物が多いように思われ、第二遺構面の年代を江戸時代でも古い時期に考えたくなるところであるが、土坑などから出土している遺物を見る限り、この面は江戸時代の後期、それも幕末に近い時期と言えよう。この面で検出した遺構には、土坑・土壠・建物・井戸などがある。

このうち土壠は、幅約60cmで、南北方向につくられている。南側を攪乱に北側を土坑によって削り取られてしまっており、その延長距離については不明である。ただ、北側の途切れた部分から15mほど北で確認した結果、ここではその痕跡すら検出できなかった。また、基底部のみが残つていただけであるが、用いられている石も比較的小さなものであることからも屋敷地を画するような大規模なものではなく、敷地内の目隠し的な用途をもった土壠であったと考えられよう。

調査区西側において南北方向に5mの間隔を保って平行に延びる石列を検出した。長さは7mほどである。また、この石列の間でいくつかの礎石と思われる石を検出している。礎石は20cmほどと小さなもので、地盤が砂地であるにもかかわらず根石は施しておらずそのまま置かれている。礎石の並びから具体的な建物の規模を復元するには至っていないが、前述の石列も含めてこの部分に建物があったものと想定している。ただし礎石の貧弱な様相からも母屋に付属する納屋などの簡単な建物であったと考えている。

井戸(SE-01)としたものは、調査区西北部で検出した径1.5mほどの石組遺構である。一段しか石組はなく、また、底部に曲げものなどを設置した痕跡も認められず、積極的に井戸とする根拠に乏しい状況である。

そのほか数多くの土坑を検出しているが、これらの性格については残念ながら不明と言わざるを得ない。

c. 第三遺構面の遺構

第三遺構面は、第二遺構面よりさらに20cmほど下がった面である。一部で炭および焼土が薄く堆積しており、火災に遇った可能性が考えられる。

平面図は図示できなかったが、この面は遺構密度が低く、わずかに数基の土坑と石列を検出したのみである。(図版-8参照)石列は、20cm~30cm大のやや扁平な石を不等間隔で南北方向に並べたもので、建物の礎石として用いられていたものなのか、その他の施設の一部なのかは不明である。

土坑の性格についても不明だが、これらの土坑から出土している遺物には後述するように15世紀代の遺物も見受けられるし、新しいものでも唐津の皿・焼塩壺の蓋など17世紀中頃までの遺物であることから、この遺構面の時期は江戸時代前期と考えている。

2. 遺 物

出土遺物全体として見れば、第1層および第一遺構面の遺構から出土している遺物が圧倒的に多い。ただしこれらはプリント模様の染付製品や終戦直前の生活用品など明治以降、昭和20年までのものであり直接和歌山城に関係するものではない。このことを考慮してこれらの遺物については、実測図から割愛した。以下、包含層・遺構別に述べることとする。

a. 第2層出土の遺物

(1)は柿釉を施した灯明皿である。土師器の皿のうち(2)は白色を呈し焼成は良く底部は糸切りとなっている。これについては、江戸時代のものと考えてもよいが、(3)の皿はそのつくり、形態から15世紀代の古いものと考えている。(5)は伊万里の筒茶碗である。18世紀末ないし19世紀初めの製品であろう。(7~11)は唐津の碗・鉢である。(12)は焼塩壺である。底部から筒状に立上り、口縁部を狭めている。体部に刻印は施されていないが、おそらく主要産地である堺の製品と思われる。17世紀中頃までのものであろう。(13)は瀬戸の鉢で、陰刻による装飾を施した体部外面には鉄釉と緑釉を流しかけている。18世紀末ないし19世紀初頭の製品である。(14)は中国製の青磁の碗で、全体に粗い貫入があり、口縁部には粗略な雷文帯が巡らされている。15世紀代の製品であり伝世品と考えている。

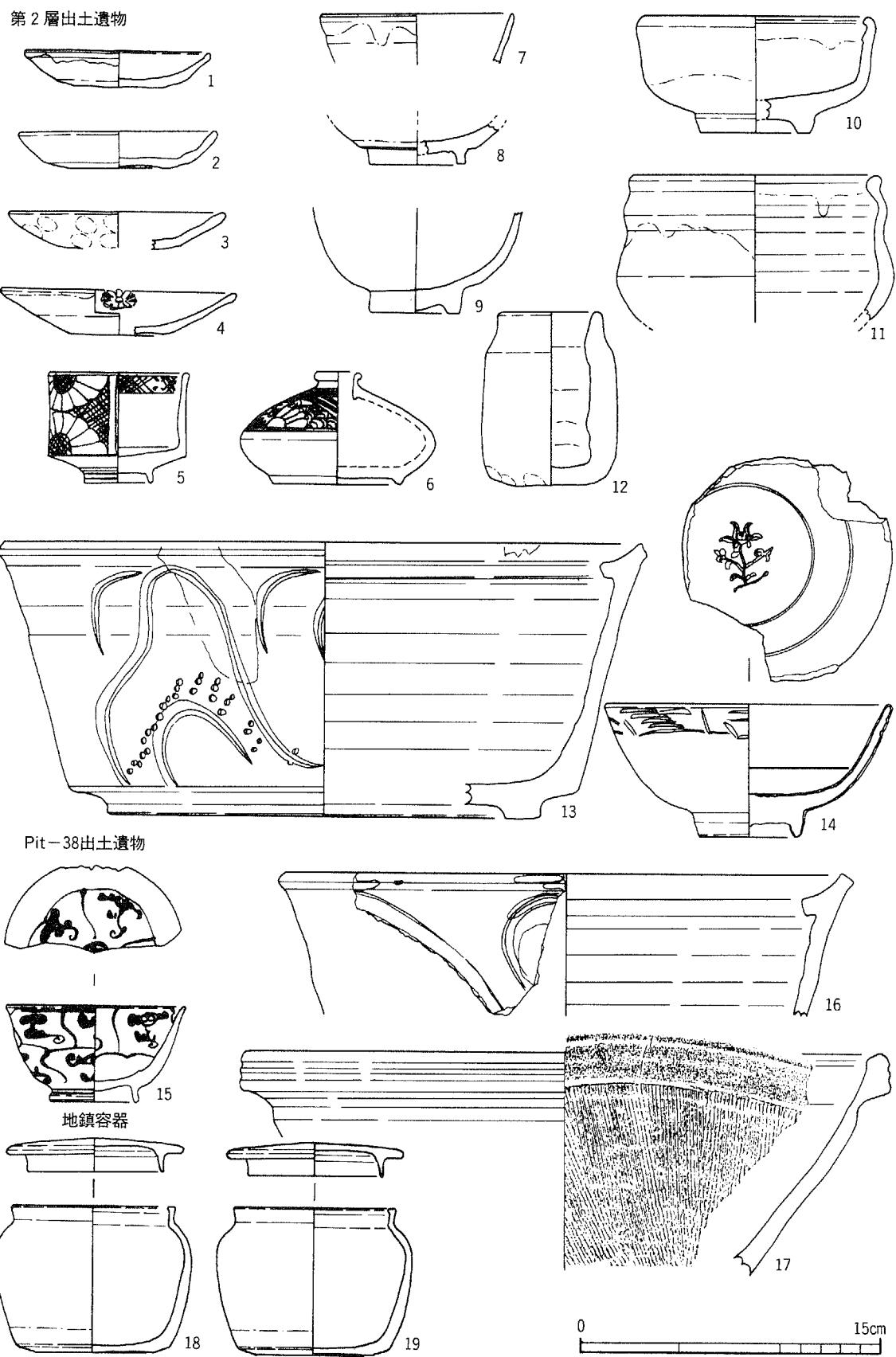


図5 遺物実測図(1)



図6 遺物実測図(2)

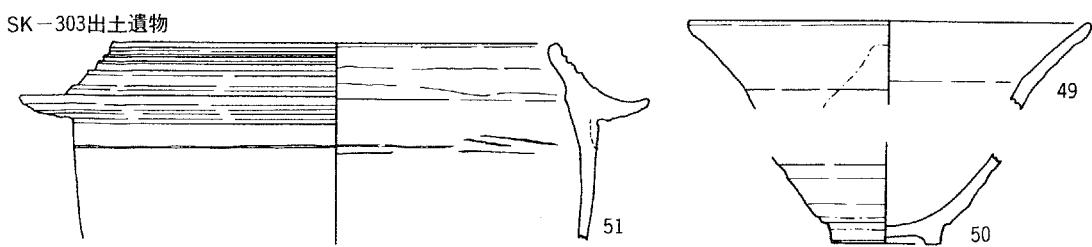


図7 遺物実測図(3)

b. Pit-38出土の遺物

(15)は瀬戸の染付の碗である。(16)は前述した(13)と同様の瀬戸の鉢である。(17)は摺鉢で、内面の摺目は一単位20本で全面に施されている。堺摺鉢と思われるが、焼成は通常見られるものより良く、色調もやや淡い茶色を呈している。

c. 地 鎮

(17・18)は地鎮に用いられたと考えられる蓋付きの壺である。全体に暗い草緑色を呈している。この壺については、江戸時代より新しいものであることは確実であり、昭和に入ってからのものである可能性もある。

d. Pit-201出土の遺物

(20)は柿釉の灯明皿である。(21)は陶器の燭台、(22)は全面に黄釉を施した陶器の皿である。

e. SK-205出土の遺物

土師器の皿(24)はやや白色を呈し、その形態から15世紀代の製品と考えられる。(25)は備前の鉢(水指し?)である。全体に茶色を呈し、一部に胡麻釉がかかっている。

f. SK-208出土の遺物

土師器の皿(26)や陶器の灯明皿(27)、焼塩壺(28)、染付の碗などが出土している。このうち焼塩壺はやや小型のもので内部には成形時の布目痕が残っている。また、染付製品では、伊万里(31)と瀬戸の製品(32~35)が混じって出土している。

g. SK-212出土の遺物

染付製品はいずれも伊万里の製品である。おおむね18世紀の中頃から後半にかけてのものと言えよう。(40)の狛犬は型押し成形によるもので、焼成は良く肌色を呈している。

h. SK-301出土の遺物

(41)は丹波の摺鉢である。内面には一単位7本の摺り目が2cmほどの間隔をおいて施されている。(42)の土師皿は灯明皿として使われていたようで、タール状の煤が付着している。

i. SK-302出土の遺物

(43)は焼塩壺の蓋である。(44~46)は土師器の皿。(47~49)は唐津の皿で、47・48の内面底部には胎土目の痕跡が認められる。16世紀末ないし17世紀初めのものと考えられよう。

j. SK-303出土の遺物

(51)は瓦質の羽釜である。鍔の下半から体部にかけて煤が付着している。(50)は天目茶碗で、体部下半の露胎部には化粧土が施されている。国産の製品と考えている。

III ま と め

今回の調査地は、先述したように重臣クラスの居住地である三の丸の西端部で、江戸時代の終わり頃の絵図では、鈴木・下条という大身の家臣の屋敷地となっているところに相当するものと考えられる。

調査の結果、江戸時代の遺構としては小規模な礎石建物・土塀・土坑などを検出したのみで、屋敷地の規模やその構造をあきらかにするには至らなかった。このことは、すでに当時の遺構面が削平を受けていることも考えられるが、むしろ広大な屋敷地だけに今回の調査区が、母屋などの主体部からはずれていた可能性が高いものと思っている。その意味では、今後この周辺での調査に期待が持てるものと言えよう。

また、和歌山城とは直接関係はないが、今回の調査では上層からも15・16世紀代の遺物が何点か出土しており、最下層からはこの時期のものと思われる遺構が検出されている。(SK-301・302・303)あきらかに和歌山城に先行するものであり、当地周辺ではこれまで確認のされていない時期のものである。

紀ノ川の河道の変遷とも関係することであろうが、当時のこの付近の状況、集落の展開を知る上で見逃せないものと言えようし、今後の調査においては、和歌山城のみならずこの点にも留意しておく必要があろう。



第一遺構面全景(西から)



第一遺構面東半部(南から)



第一遺構面西半部(西から)



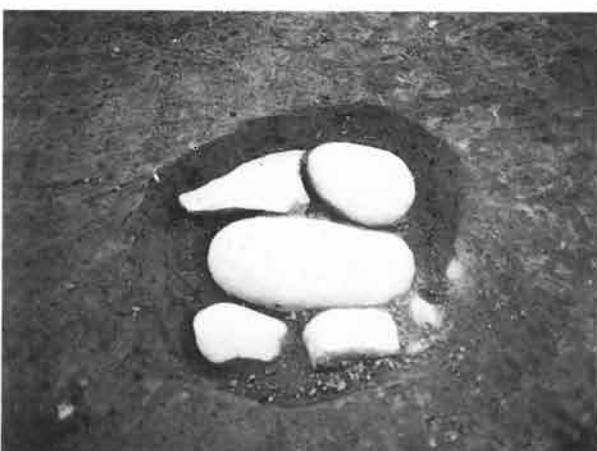
礎石建物〔SB-03〕(西から)



礎石建物〔SB-01・02・03〕(南から)



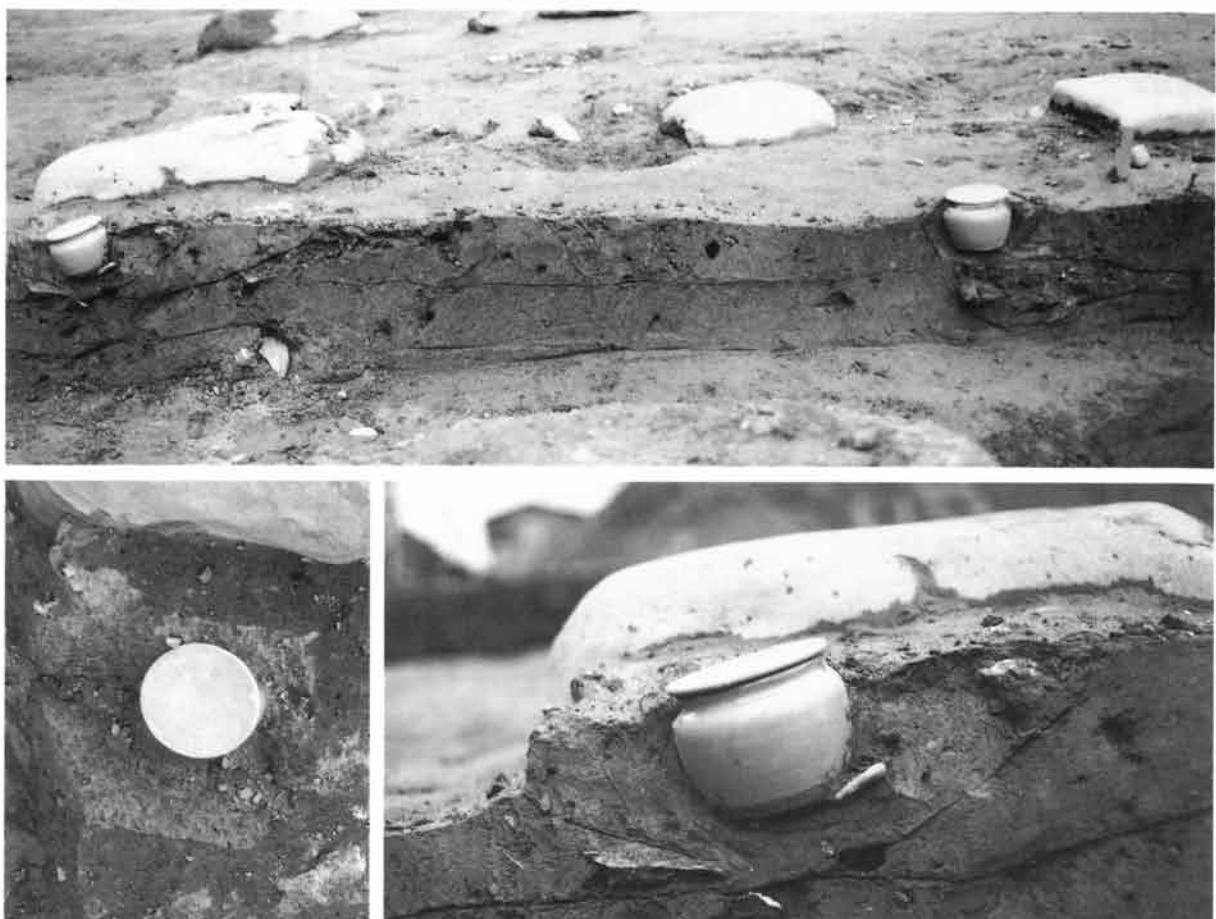
礎石建物〔SB-01・02〕(東から)



根石据置状況(上SB-01・下SB-02)



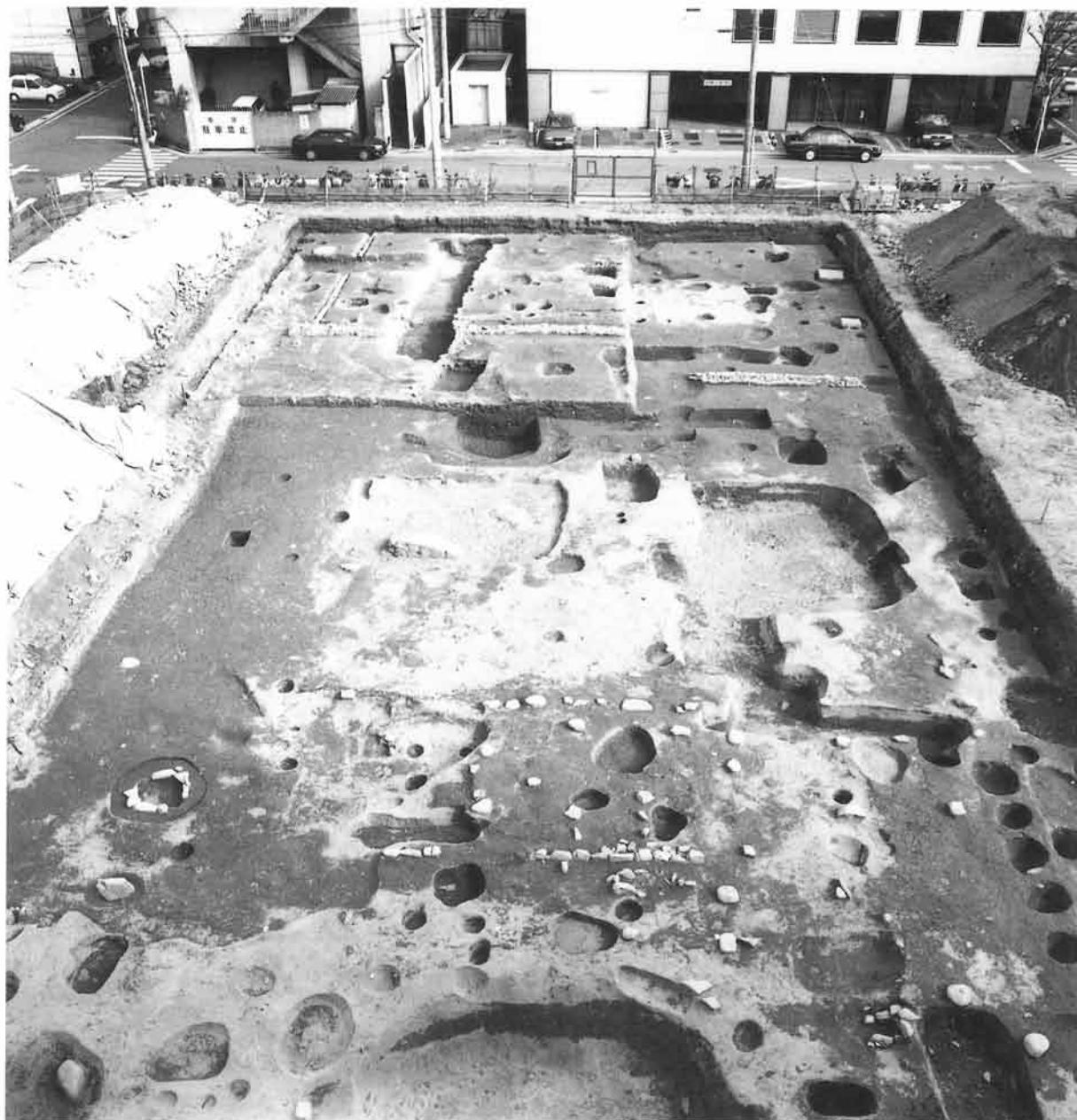
土壠基礎(南から)



地鎮容器埋納状況



階段を伴う防空壕(東から)



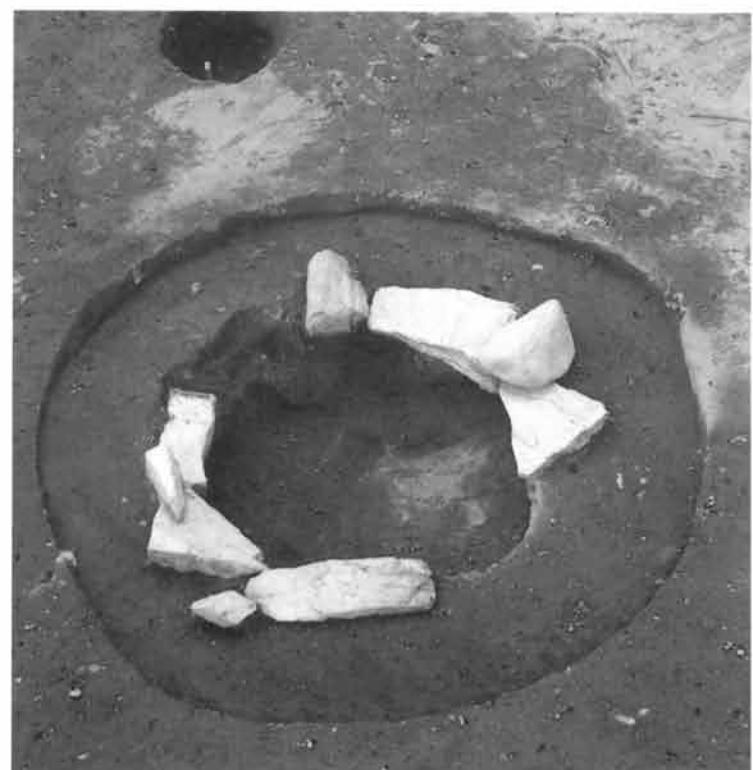
第二遺構面全景(西から)



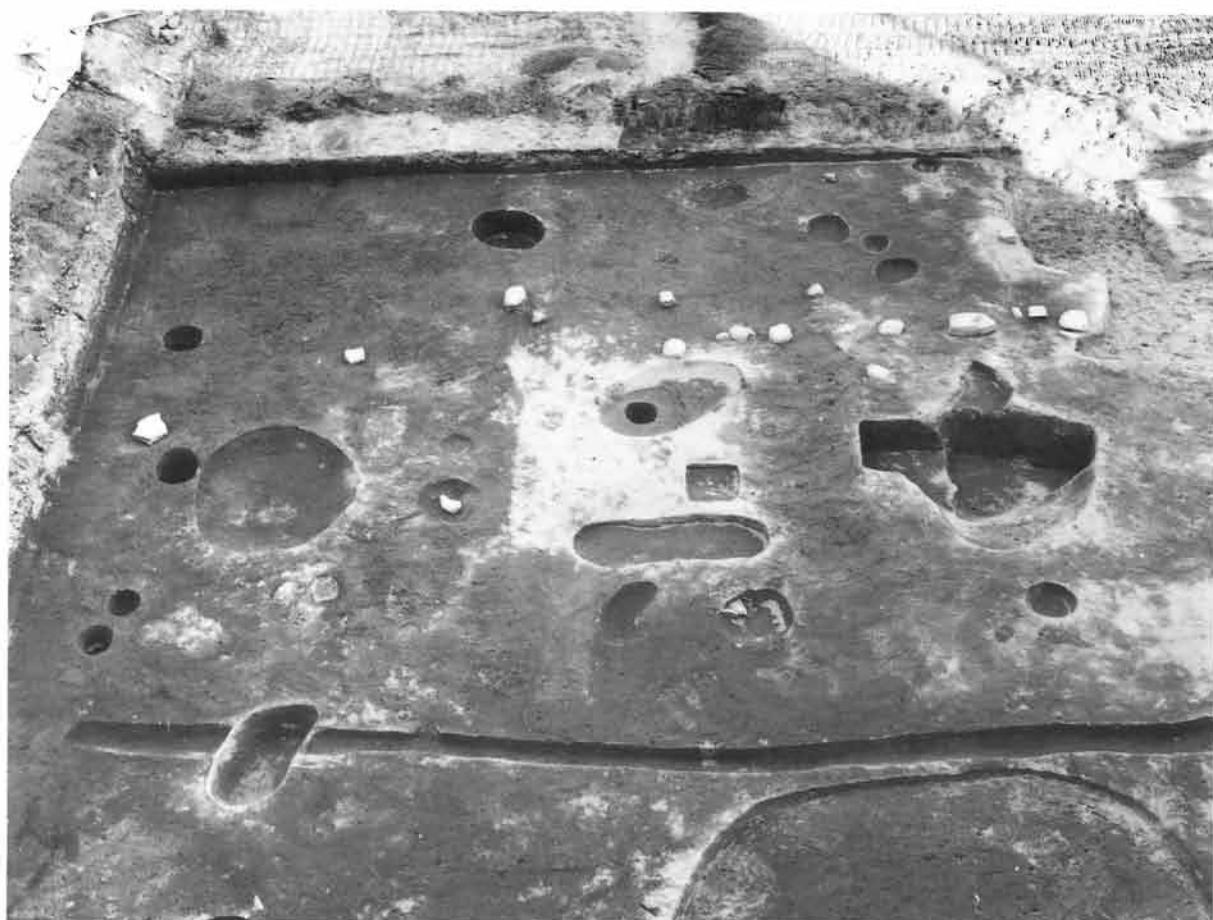
石列・礎石建物(上から)



土壙基礎(南から)



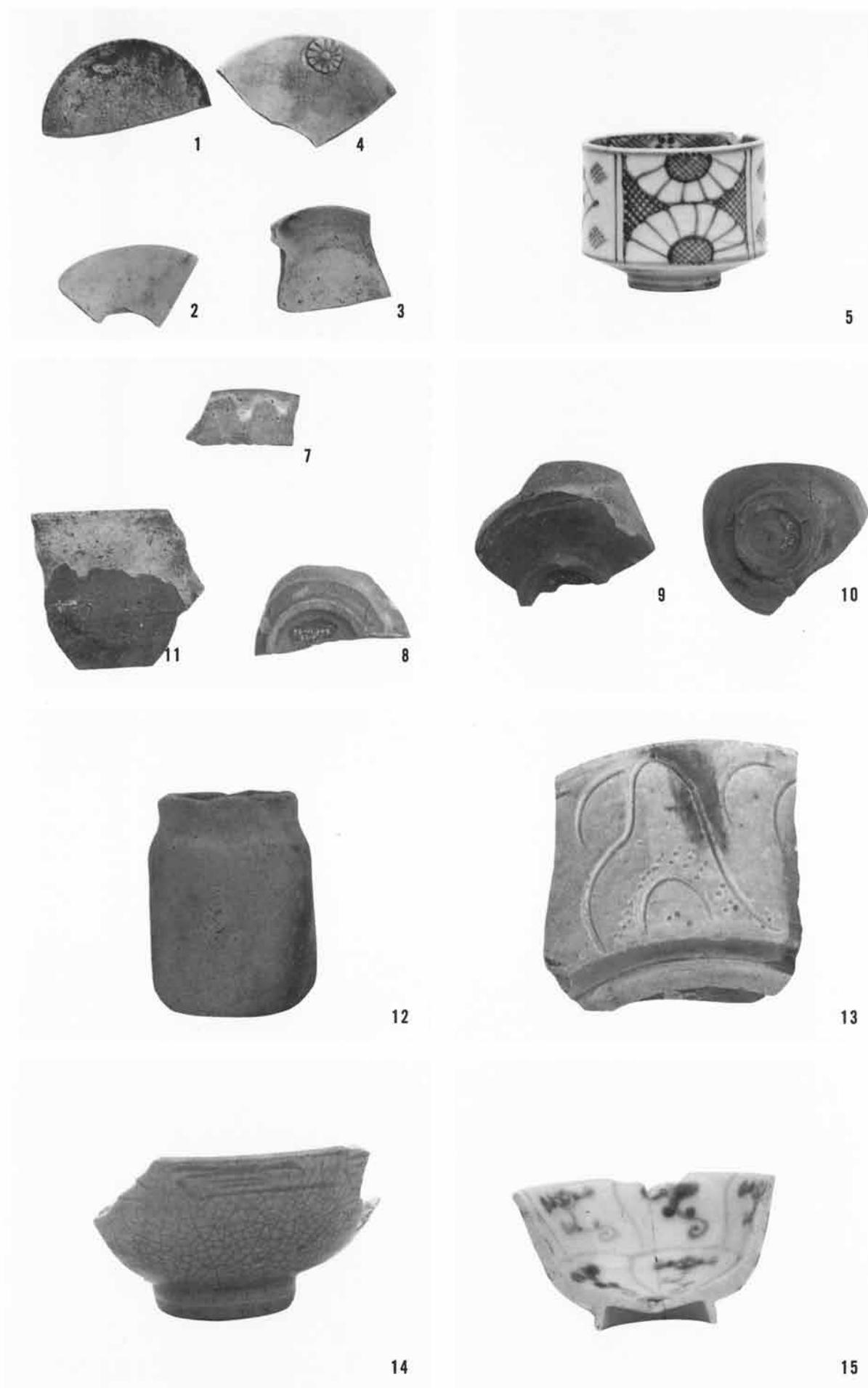
井戸(南から)

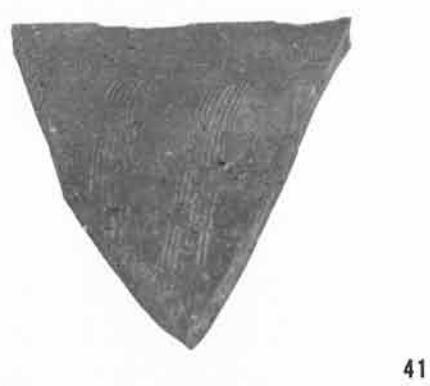
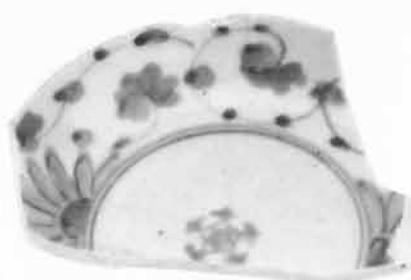


第三遺構面全景(西から)



第三遺構面全景(南から)





47

51

報告書抄録

ふりがな	わかやまじょうあと はっくつちょうさがいほう							
書名	和歌山城跡発掘調査概報							
副書名	県営城北団地建設に伴う発掘調査							
編著者名	村田 弘							
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640 和歌山県和歌山市広道20番地 ☎0734-33-3843							
発行年月日	西暦1997年 3月							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
	市町村	遺跡番号						
わかやまじょうあと 和歌山城跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし はしばんちょう 和歌山市八番丁	3020150	379	34度 14分 39秒	135度 10分 11秒	1996.11.22 ～ 1997.03.31	990	県営住宅 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
和歌山城跡	城郭	近世	建物 土壙 井戸	近世陶器 土師器 焼塩壺	和歌山城関係の他、 15・16世紀の遺物。 遺構が少量ながら 検出されている。			

和歌山城跡

—県営城北団地建設に伴う発掘調査—

1997.3

編集 優和歌山県文化財センター
発行

印刷 西岡総合印刷株式会社